

子育てから介護まで「ずっと伊丹で大丈夫!」と、はなせる街づくりを目指して。

伊丹市議会議員/無所属/33歳 やまぞの有理

【プロフィール】

1985年8月伊丹生まれ・天神川小・荒牧中学校を経て明治大学公共政策大学院修了/2011年伊丹市議会議員選挙において初当選(当時25歳最年少当選)現在2期目/マニフェスト大賞受賞(第11回・第12回と連続受賞)/パトランチーム伊丹広報担当/未生流(師範)・表千家/わな狩猟免許/伊丹市女性消防団/

このチラシは、伊丹市議会議員やまぞの有理が、市政情報や活動報告などをお届けしているニュースです。街頭活動・ポスティングの配布でお届けしております!



やまぞの有理



政策、ニュース、イベント告知など
やまぞの有理の情報はSNS等で
タイムリーに発信しています!!
ぜひフォローをお願いします



やまぞの有理の議会での提案により、 小中学校での色覚チョーク導入が広がっています!

色覚チョーク導入の必要性

色弱は色を感知する細胞に原因があり、赤・緑・茶といった色が同じような色に見えたり、淡いピンクがグレーや白に見えたりします。色弱者(色覚異常・色盲・色覚障害とも称されます)の割合は、男性が20人に1人、女性が500人に1人とされ、色弱の子どもは学校で黒板のチョークが見えづらく悩んでいるケースも多いです。これを解消するために開発をされたのが色弱者にも色の識別がしやすくなったチョーク(色覚チョーク)。特殊な素材を使うことで一般のチョークより色がクリアに見えるのが特徴です。

文部科学省は「赤・緑・青・茶色など色のチョークを使用すると見えにくいため、避けるようにする」とし、白と黄色の2色のみを使うように求めています。

色覚チョークを導入すれば、色弱者の児童を含めた全ての児童が従来のチョークよりも黒板の文字が見やすくなるだけでなく教員が2色のチョーク以外の色も気兼ねなく使用することが可能になりその結果、学習環境の向上が見込まれます。

やまぞの有理は全ての児童にとってわかりやすい教育は重要であると考え、色覚チョークの導入を議会で提案を続けました。2017年9月議会において、色覚チョークの導入提案をしたところ、「色覚チョーク未導入であり、導入を検討したい」という答弁でしたが、2018年の導入状況と今後の対応は?

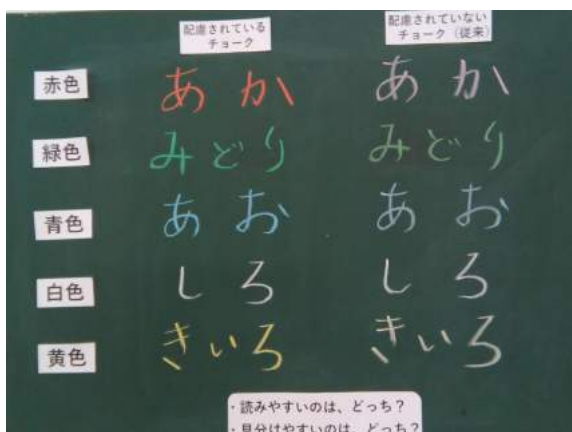
チョークを比較すれば
違いは一目瞭然!!



どんどん
広がります!!



▼企業努力によって従来のチョークと同じ価格



伊丹市の色覚チョーク導入状況

保健担当課会などで各学校へ紹介し周知を進め、2018年2月末時点で小学校17校中7校が、中学校では8校中2校が色覚チョークを使用。既に購入していたチョークから色覚チョークへと徐々に移行している学校も複数あります。市教育委員会としては、色覚チョークの使用は色覚に配慮を要する児童生徒に対する効果的な配慮の一つであると認識していることから、今後も引き続き使用の拡大を図って参ります!

カラーユニバーサルデザインに配慮された社会を目指し、ネットワーク発足！

人間の色の感じ方は一様でなく、遺伝子のタイプやさまざまな目の疾患によって色の見え方が一般の人と異なる人が、多く存在します。色弱者は前ページでもお伝えしましたが、日本では男性の20人に1人、女性の500人に1人と言われ、血液型がAB型の男性の比率に匹敵をします。これらの人たちは視力は普通と変わらず細かいものまで十分に見えますが、一部の色の組み合わせについて見え方が異なります。色弱者に対して配慮が十分でない場合や誤った理解などが散見される社会を変える事を目的に、やまぞの有理が発起人・事務局として「カラーユニバーサルデザイン推進ネットワーク(以下CUDN)」を発足させました。このネットワークでは所属している地方議員がそれぞれ議会で、色覚チョーク導入を後押しする議会質問を行っており、その結果、日本中の学校現場で色覚チョークの導入が加速しています。2018年3月の衆議員文科委員会において、CUDN顧問の桜井シュウ衆議院議員と連携し、国会に黒板(色覚チョークと従来チョークを比較するため)を持ち込んで色覚チョーク導入について文部科学大臣に対して行いました。



◀ 文部科学委員会での質疑の様子

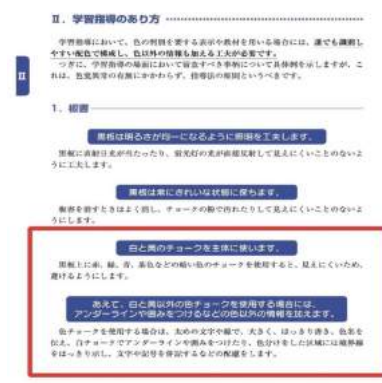


やまぞの 色覚チョーク導入状況について伊丹市の状況を県内自治体と比較することを目的に、兵庫県内4市町に対し色覚チョーク導入について調査を実施しました。調査結果から導入状況は約一割程度であり導入校では見やすいと好評でした。調査を進めると「色覚チョークについてこの調査ではじめて知った。」「今まで導入をしていなかったが前向きに導入を検討したい。」と回答した自治体が多く散見されました。

桜井 色覚チョークが全国の学校現場で普及していない要因は、文部科学省が作成した「色覚に関する指導資料(※1)」が「白と黄色のチョーク」を推奨しているため、と考えています。資料が策定された当時は、「白と黄色チョーク」は、色弱者に対する配慮として画期的だったのかもしれませんが、しかし、黄色チョークの中には白色と区別しづらいものがあるのが現状です。

やまぞの また、完全に白と黄色のチョークのみ使用するという一部の自治体を除き、学校現場では少なくとも赤色はかなり使われていることがわかっていて、その他のチョークも割合は少ないけれど、例えば算数や国語などで複雑なものを判別させるために使用されていることがわかっています。

桜井 人間の色覚の多様性に配慮し、より多くの人に利用しやすい配色を行った製品や施設・建築物、環境、サービス、情報を提供するという「カラーユニバーサルデザイン」の考え方が社会に普及し始めており、その一環として白と黄色以外の色でも暗くなく、さらになるべく見分けやすくするために色相、明度、彩度を工夫した五色(白/朱赤/黄/青/緑)の色覚チョークが開発された今、見直しが必要になっているのではないのでしょうか。



やまぞの そこで、桜井シュウ衆議院議員と連携し衆議員文部科学委員会での質問で色覚チョークに関する内容を取り上げて頂き政府の見解を確認しました。

桜井 文部科学委員会での質問では、やまぞの議員が調査した内容を基に、地方の現状について触れつつ質問をおこないました。内容は「色覚に関する指導の資料」に但書きで、「色覚に配慮されたチョークについてはこの限りではない」との注釈をつけてはどうかと提案をいたしました。文部科学大臣からは、色覚チョークが開発される前に作成をした資料であって、質問主意書では変更について現時点では見直す必要はないと伝えましたが、状況の変化等にに応じて資料の改定時に考える課題であると答弁しました。

やまぞの 社会に改めて色覚チョークが認知され、全国で色覚チョークの導入を求める社会の声が更に高まることを期待し、私たちも色覚チョークをはじめとした教育現場でのカラーユニバーサルデザイン推進にむけて引き続き力を尽くしてまいります。

